

P.E.N.

Japan P.E.N. Club 2016.7 Vol. 438

〈催し物のご案内〉 公開シンポジウム
「メディアの本分 ジャーナリズムの力」

(詳細については23ページ参照)

日時 7月23日(土) 14時~16時

場所 専修大学神田校舎1号館301教室

参加費無料、申し込み不要



平和委員会シンポジウム

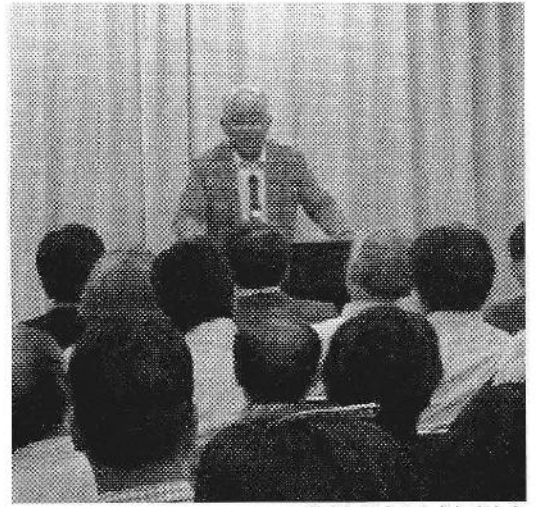
「戦争と文学」——日本が世界平和に負うべき義務

4月30日(土) 14時~16時30分、神田神保町・東京堂書店の東京堂ホールで「戦争と文学」をテーマに平和委員会シンポジウムが開催された。会場は100席は事前申込制による参加者で早々と満席になり、定刻、高橋千帆破常務理事のあいさつで開会。

第1部は浅田次郎会長の基調講演に続き、梓澤和幸平和委員長をコーディネーターに作家の志茂田景樹氏、作家の沖方丁氏、作家・翻訳家の松本侑子氏が、それぞれの「戦争と文学」への思い、戦雲たれこめる中で文学は人間をどう描いたか、描くかについて語った。第2部は参加者と講演者のディスカッションが行われ、終了予定時間いつ

第1部 基調講演とトーク

浅田次郎会長 戦後70年が経ち、どんなことも風化していくが、忘れられていくことだけが風化ではないと思う。アジア太平洋戦争に限定して考えても、知らない世代が大多数を占めるようになってくると、神風特攻隊とか召集令状を受けて出征することだとか、あるイメージに類型化され伝えられていく。



熱心に聞き入る参加者たち

昭和26年生まれで戦争をまったく知らない私が戦争をテーマにした小説を書くのは、実はおこがましく、書き始めた時に、書いていいものかどうかという悩みが非常に強かった。私のデビュー作『メトロに乗って』は、昭和30年代に私が体験した戦後の匂いを書いたつもりだったのですが、どうしても戦争に直接触れざるを得ないので、これは真面目に調べないといけないなど、取材をしました。戦争をテーマにした小説を書くときの心構えとして、戦時中に生きた人びとがどういう立場で、どのような思いで戦争を体験されたかを調べ直し、取材をして書いていく。これは小説というものしかできないと思う。なぜならば、小説というのは人間を描くのが使命ですから。

父親がまだ存命だったので、父親から多く話を聞きました。昔くのはおこがましいと思つたら、戦争小説はなくなるんですね。戦時を生きた人間の姿というものを書き、語り伝えなければならぬという小説家の使命に立てば、いつの時代にも誰かがやらなければならない。

父親は大正13年生まれ、昭和19年の最悪の戦況で徴兵された世代です。母親は昭和2年生まれ、女子校に入学したとたんに工場に行かされた勤労動員の世代で、母親から学校生活の話を聞いたことはありません。聞いたのは勤労動員先の工場での生活です。昭和12年に国家総動員法が成立した。いざ戦争となつたら、あらゆるものを国家の権限によって動員することができるといっておそろしい法律です。女学生、今の女子高校生の世代であっても、勉強なんかする必要はないから工場へ行って飛行機の部品を組み立てると……。

私たちは、ある風化したイメージの中で、軍人は悪、一般庶民は犠牲者と考えがちです。ところが明治6年に公布された徴兵令がある限りは、軍人の90数パーセントは一般国民なんです。職業軍人というのは微々たるものしかない。兵隊さんと俗にいわれる人は、20歳になつたら徴兵検査を受けて、召集状で体のいい者から順番に入営しなければならず、いざ戦争が始まれば軍の命令に従って戦場に送り込まれて死ぬほかはなかった。

ガダルカナルで日本兵がたくさん飢え死にしたの

は誰でも知っています。この人たちのほとんどが学生、勤め人、都電の運転手、郵便配達、学校の先生など、そういう職業を持っている人、家庭を持っているふつうの人だった。これが戦争の実態で、決して軍が悪、庶民が犠牲者であるというような図式は成り立たない。国家総動員法と徴兵令がある限りは国民全員が戦争に巻き込まれ、昭和20年には17歳から45歳までの男子はおおよそ兵隊に取られたということなのです。

私は19歳で白衛隊に行きました。三島由紀夫が腹を切ったということが不思議でたまらなくて、文学少年だったものですから、三島のああいう亡くなり方は大変なショックで、死んだ場所に行つてみようというのが、入隊の動機でした。

この会場の隣に「駿」という小さい喫茶店があり、小説家の卵の人たちと近くにあつた出版社の編集者が打ち合わせする場所でした。私も高校生の頃、河出書房の若い編集者に原稿を持ち込んでいて、「駿」で、こんなのため、もうやめちまえみたいなことを言われて添削を受けていました。

そういう立場で自衛隊にしばらくいた私が戦争小説を書かなかつたら卑怯だろうという気持ちになりました。やらなきゃいけないことをやらないのも卑怯な感じ、おこがましく戦争小説を書き始めたというわけです。

一昨年、集英社から『戦争と文学』という全20巻の全集が出ましたが、その編集に4年間携わりまし



浅田次郎氏

た。埋もれてしまいそうな戦争小説の名作を20巻にまとめようという、壮大な、でも誰かがやらなければいけない、なくなってしまう小説ですから、携わりました。この出版不況の折に、そういう企画を作った集英社ほしたものだと思えます。出版不況と簡単に言いますが、これは文化の崩壊なんですよ。出版不況をほかの不況と一緒にしてほしくない。編集出版事業の衰退は文化が衰退するというものですから。

4、5年前、文庫本で3巻になる『終わらざる夏』という小説を書きました。二つの大きなテーマがあつて、一つは、うやむやになつている北方領土とは一体何なのか。もう一つのテーマは、一般国民はどのようなシステムで兵隊にされたのかという徴兵の仕組みです。

ときどき痛烈な批判のお手紙が来るんですよ。上官を「何々殿」と呼ぶのは陸軍だけの習慣で、海軍では「殿」はないとか、武器、兵器でも資料だけ

で書いてしまうと、「自分が操作していたから、この記述は違う」などとお叱りをちょうだいします。書き手にとつては恐怖ですね。

しかし、長い小説の半分くらいになりますと、違う恐怖感が生まれるんです。死者に対する恐怖感、生きている人からのお叱りでなく、戦場のシーンなどを自分がどう書こうと、違うと言えない人びとがいるという恐怖です。死者に対して責任を持たなければならぬという恐怖感は、前半の恐怖感とは比べものにならないくらいです。そのような覚悟をもつて書いておりましたので、変だなと思う方があつてもお許し願いたいと思います。

戦後70年間、決して戦争を忘れたわけではない、そのようにして学者も文学者も一般の人びとも振り返り続けてきた。私たちが反省をし続け、戦争を振り返り続けてきたというのは確かなことで、その努力を決して無にしてはならないというのが私の考え方です。

憲法改正の問題が騒がれていますが、憲法第9条、不戦憲法は立派なものです。改憲論者の中にはアメリカから押しつけられたという論拠で語る人がいますが、誰が作るうが、どこから押しつけられようが、中身がよければ出自を問うべきではないと思う。多少の改憲は必要と思いますが、第9条は手を触れずに、できれば第1条にするべきだと思つています。第1条「戦争の放棄」、これはすごい憲法になると思います。

※ ※ ※

ときには聴衆から笑い声もこぼれるユーモアをまじえた浅田会長のスピーチに続き、梓澤平和委員長のコーディネートで志茂田氏、沖方氏、松本氏が戦争と文学について語った。

第一番目のトークは、終戦時に満5歳で、2、3歳の頃に聞いた母の読み聞かせの声の記憶を復活させて「よい子に読み聞かせ隊」の隊長として全国で活動している志茂田景樹さん。15歳離れた一番上の兄のことから語り始めた。

昭和20年3月に召集令状によりソ満国境近くに駐屯した兄はそのまま帰って来なかった。行方不明という通知があつただけで戦死の公報もなく、兄の戦死が8月22日から23日にかけての夜半のことだという戦死公報を受け取つたのは、昭和27年になってからだったと志茂田さんは言う。兄の部隊は8月15日のポツダム宣言受諾後のソ連軍の総攻撃で2人を残して全滅した。その生き残りの2人がシベリアの収容所から引き揚げて来たことで兄の部隊が全滅した様子が分かり、気丈な母が正座して泣いていた、と中学校入学の頃の記憶を語った。

この兄からガラス窓に字を書いて教えてもらったことに触れて、片仮名は全部マスターしたが、召集令状が来たので平仮名は途中までしか覚えられなかったこと、兄からの軍事郵便の葉書が届いたが、「僕宛のは、たった一通だったけれど、くり



志茂田景樹氏

かえし読んだものです」と振り返る。

「全部片仮名でした。大きくなったら戦闘機乗りになってB29を撃ち落とさないといった内容で、末尾に、今、迎春花が咲いているよ、と書いてありました」

「高校に入ってから兄の片仮名の葉書を改めて読んで、最後に取ってつけたような迎春花の一行に釘付けになった。兄はきつと、内地、ふるさとへ生還したかったんだろうな、とその一行を見て思いました」

志茂田さんは当時の兄の心境をこう思いやる。そして、30代の頃に読んだ大岡昇平『レイテ戦記』と太宰治『トカトントン』の2作について語った。本当に戦争の悲惨さが分かる『レイテ戦記』には、「肉を食らう現場は描写されていないが、レイテだけでなく、ニューギニアでもあったという噂はかなり信じよう性をもって伝わっていたというような記述もあり、ずいぶんショックを受け、戦争の悲惨さ、

むごさというものを実際に受けて立つのは、本来が軍人でない兵隊さんたちなんだな」と思ったという。

戦後に書かれた『トカトントン』は、内地の兵舎から復員した青年がトカトントンという釘を打つ幻聴を覚える話で、「戦時中の重圧から解放されたあまりの幻聴で、これは平和の象徴と言っている」との感想を持ったという。そして、「この2作を読むだけで、戦争というのは本当に愚かだなと、30代にして、ようやく分かった。戦争は絶対にしちゃいけないんだと、今日、あらためて身にしてみている」と結んだ。

次に沖方丁さんが、若い世代が感じている戦争について語った。

「戦争とはどういふものかよく分からないけれど、早くこの国が戦争状態になってほしいと心の底で願う気持ちがあるんだと広がっているように思う」
その根本の第一は、「とにかく貧乏でお金がない。その一方で、六本木ヒルズのような超高級マンションに住む人たちもいる。ものすごい格差が広がってきている。そうやってきた時に若者が心の底で思うことのひとつとして、皆一緒にいたい、もう一回ゼロに戻ってほしい。徴兵されてしまえば、六本木ヒルズに住んでいる人だろうが、コンビニでバイトしている人だろうが、戦時中の軍事的な一体感、国家的な熱狂感というか、そういったものに憧れる気持ちが芽生えてきている」と経済格差の問題を取り上げる。

そういう若者たちのニーズに対して、沖方さんは「どんな物語を提供すればいいんだろう」と悩んでいるという。その一つの答えとして、江戸時代前期に注目していることを挙げて、江戸幕府の最大の特徴は戦争を放棄したこと、と指摘する。

「このまま内戦状態が続くと、いつ幕府が滅ぼされるか分からない。とにかく合戦を否定する。それまで戦闘訓練をせよと言われていた若者たちが、今日から合戦をしなければならないわけです。どんどん大名家が潰されていって失業する武士が大量に出てきた。合戦が自己実現であり、家名を高め、領土を獲得する、金持ちになるという立身出世の道が断たれてしまい、若者たちの夢も潰れてしまった」

そんな時に、中国では明国が清国に滅ぼされて、明国の人たちが日本に救援を求めてくる。

「幕府としては国内で余っている人間とか政治に不満を持っている人間を国外に出すチャンスで、そういう選択もあった。だが、あたら若い人材を大量に海外で無駄に死なせたところで国力はどうなるのだ、と第3の選択を模索するんです。どうしたら彼らを新しい時代に連れていけるのかを試行錯誤しながら、現代にまで続く新しい職業を作った」
それが沖方さんの長編『天地明察』で取り上げた「天文方の創設」だという。頭のいい若者に日星を付け、彼らに「本当にやりたいこと、平和で人民の役に立ち、かつ戦争にならない職業を創出しろ」と資金を出し、長年にわたって面倒をみる。「主人公



沖方丁氏

の渋川春海は24年にわたって失敗するのですが、それでも幕府は見捨てずに、お金を出し続けたのは、職業を創設することによって日本の人民を殺さずに済むという一縷の望みがあったからで、儒学、数学、医学などにもどんどんお金をかけていく。そうすることで、ようやく戦争回避のすべが出来上がっていった」と説明する。

さらに沖方さんは、幕府が対外戦争に踏み出さなかったもう一つの理由を挙げる。それは戦争のテクノロジーが変わってしまったので、そこに新たな戦時経済が現われるのを怖れて、「軍艦造りを禁じて海軍を持つとしないかったことや大量殺戮兵器である大砲の製造を封印したこと」とも分析する。

戦争の様相の変化に関して、「これからの戦争はサイバーテロ、ドローン、特殊部隊によるテクノロジの戦いとなっていく。超精鋭のプロ中のプロがやるものになってきている。若者たちを大量に投入する状態になると、プロでやればいいことを一般人

がやることになる。プロがやっていることと一般人がやっていることの乖離がどんどん進んでいってしまう。本当の戦争を知るプロと乖離したところで、戦争状態になればいい、紛争状態になればいいという層が膨らんでいて、テロリズムに奔っていく。かつて国家総動員法によって成り立った恐ろしい空気にみずから入っていくこうとする若者の受け皿が、テロリズムになっている」と分析した上で、次のように結んだ。

「テロリズムに若者たちを向かわせない最大の手段は、彼らが社会で活躍できる場を与えてあげること。これが絶対に必要だと思う。そのためには彼ら自身に夢を持たせ、本当にやりたいことは必ず実現できるという希望を与えてあげる。私は微々たる力ながら、物語を著して若者に夢を与えてあげたいと思っている次第です」

続いて松本侑子さんが「私たちに今、表現の自由、思想・信条の自由が保障されていて、平和主義の憲法を持っていることはなんとすばらしいことだろうと思う」と語り、自著『恋の虫 山崎富栄と太宰治』で描いた2人のことに触れていた。

太宰は明治42年の生まれ。実家は青森県有数の大地主で、父親は衆議院議員、後に貴族院議員となった。弘前高等学校（現・弘前大学）時代からすでに小説を書いていたが、共産主義に傾倒した。地主階級で贅沢に暮らしている自分の存在を疑問に思い苦しみ、小作争議の左翼小説『地主一代』

を書いたが、「当時、左翼小説それ自体も非合法だった」と昭和初期の時代風潮を解説した。

昭和5年、東京帝国大学文学部仏文科に入学後、共産党のシンパ活動で警察に2回拘留され、青森県議の兄の説得で非合法活動から離脱した。「共産党の仲間を裏切った罪悪感と自責の中で、太宰は小説を書いた」と指摘。

戦時中は検閲で発禁になりにくい題材の小説を書き、軍国主義への同調を書かないスタイルを通して、青森の実家で敗戦を迎えた。戦後の日本は戦中の軍国主義、鬼畜米英から無反省のまま平和主義、英米礼賛へと向かったと太宰は考え、戦争を総括しない無責任な言論人、新聞、国家に絶望。簡単に民主主義に同調する軽薄な日本人にも失望した太宰が「無頼派作家」を自ら名乗るようになった経緯についても説明した。

「高校時代は共産主義と自分の地主階級の相剋、戦争中は積極的に戦争協力の執筆をしない、戦後は軍国主義に無反省な日本社会に抵抗、というような硬派な一面もあった」として、「太宰は国家と自分の関係を模索した誠実な知識人」と位置づける。

昭和23年6月に東京・三鷹の玉川上水で太宰と心中した山崎富栄は、大正7年、東京・御茶ノ水の生まれ。両親は日本初の美容洋裁学校の創設者で、学校長の父と副校長の母のもとで一人娘として育った。「大正デモクラシーの女性の権利と自由



松本侑子氏

の機運の東京で育ち、職業婦人としての教育を受けた」と、彼女の生い立ちを紹介。

戦時中に三井物産の商社マン奥名修一と見合い結婚したが、結婚わずか12日後に、夫はフィリピンのマニラ支店へ転勤となる。現地召集でルソン島中央の山岳地帯のバギオで戦死した。昭和21年1月、29歳であった。

富菜は「女性の権利が謳われた大正デモクラシーの時代に生まれて職業婦人になったが、戦争ですべてを失った女性」と松本さんは位置づける。夫は戦死し、自宅と銀座の美容院や校長になるはずだった学校はすべて空襲で焼失した。戦後、太宰に出会い、激しい恋をして玉川上水で入水心中した。「38歳の太宰は5回目の自殺、28歳の富菜は最初でした」と語る。

その後、フィリピンを訪れて、対日本戦で戦死した米兵1万6千人の墓道を米軍の許可を得て取材した時のことにも松本さんは触れた。

「哀しいくらい広大で、行方不明の3万人の兵士は遺体がないので墓はなく、名前と出身地、生年月日が大きな石の壁に書かれていた。日本兵はフィリピンで47万人が戦死し、40万柱の遺骨がいまも帰国しておらず、奥名修一上等兵もいまだお骨は帰っていない」と現状を語る。

「戦争は相手国、日本国を問わず、兵隊、一般市民、女性の人生を破壊してしまう。『かわいそうなぞう』を書いた作家・土家由岐雄は、奥名の姉の夫で、富菜と太宰の悲惨な死を受けて書いた小説です。上野動物園のライオンも虎も猛獣は皆銃殺された。でも、象は銃殺するのはかわいそうだと餓死をさせることになった。お腹が空いて飼育員が通るたびに立ち上がる共をして餌を欲しがり、やがて倒れ、飢餓で死んでいった。この戦争中の象を書いたのが土家由岐雄であった」と、戦争のもたらす悲惨さを訴えた。

第2部 デイスカッション

10分間の休憩をほさず、会場から出された質問カードとコーディネーターの梓澤平和委員長の問題提起に各講師が答えてディスカッションする第2部に入った。

まず、戦争文学の構想は？ という浅田会長への質問に対して、戦争小説は売れないのだけれども、戦争を書き続けることは小説家の使命で自分のライフワークと思っている、と浅田会長は答えた。『蒼穹の昴』は日中関係をずっと書いていこうと思っ

おり、現在は満州国成立の佳境に入ったところだが、昭和戦前期の軍隊の動きは難しいと明かした。

また、浅田作品の『獅子吼』に関して、これだけは言っておきたいということがあるか、という質問には、戦時に悲劇があった動物園のライオンのケースを書いたもので、どうして人間は戦争をするのか、自分の爪や牙よりもっと強力なものをなぜ持つ必要があるのか、と動物はそんなふうを考えるのではないかと思っただ、と創作の意図を語った。そして、「人類は戦争の歴史が始まったその瞬間から、あるハードルを越えてしまった。引き金を引くだけで操作できる銃はとんでもない発明であり、それが一番たくさん持っている国、銃社会を否定しない国があつて、その国と同盟するのはいかなるものかというのが、私の素朴な疑問」と結んだ。

オバマ米大統領の広島訪問に期待すること、報道機関への希望は？ という質問が、志茂田さんと松本さんになされた。

志茂田さんは、アメリカでは原爆投下で戦争を終結させることができ多数の命を救えたという考えが多くを占めていると言いが、原爆は落としてはいけなかった、それを引き金に核兵器が拡散した、と指摘した上で、広島・長崎への原爆投下によってどんなことが起きたかを「オバマ大統領が自分の目で確かめれば少しは変わってくるかも。原爆を落としたり側の負の重みを悟ってもらいたい」と述べた。松本さんは「アメリカの大統領が広島で原爆資料



梓澤和幸氏

館を見学することは非常に意味があること」であり、報道機関には「大統領の率直な反応をタブーなしでそのまま正確に報道していただきたい」とコメントした。

沖方さんに、貧困な若者たちが自衛官の道を選ばざるを得ないのを経済的な徴兵制と呼んでいることについての質問がなされた。沖方さんは、戦争を回避するために、いざという時に最小限の被害に食い止める知識のある人を育成するのは大変重要であると思うと前置きして、「若者にもっと公共資金を投入して、自衛官と同じような利益が得られるほかの職業も創設していくべき。その道のプロを目指している仕組みを国がもつと作っていくべきだ」と強調した。

また、若者に夢をもたらず教材となるような文学はあるかという質問に対しては、たとえどのような悲劇がそこで描かれていようと、それでも人間としての価値は不滅であるということを文学は教えて

くれているとして、「僕自身は文学からたくさん夢、希望、理想を学んだ」と語った。そして、インターネットの発達で読者との接点が多岐にわたるような形にしていかなければならないのだが、口本語が世界的な言語ではないことがネックになっていると指摘。「政府は各国に日本語塾を積極的に作ってほしい」と要望し、それが文化交流ともなると答えた。

会場からの質問カードが一段落したところで、梓澤委員長から「安保法案が成立した現在、戦争に反対する文学作品を書くことについて議論を」という問題提起がなされた。

浅田さんは「主張したいことは何かというのが小説の本質だと思う。私は主張していく文学というものでなければならぬと感じている」として、「わが国には不思議な伝統がある」と語る。「小説家や文化人は『紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ』と社会のことや戦争のことは私には全然関係ない。そこに文学の尊さがあるという系譜」のことで、「心につりゆくよしなしことをそこはかとなく書き綴ったから、どんな社会性を失ってしまったのだという。主張する文学を唯一保持し続けたのはプロレタリア文学で、自分の文学の手法として小林多喜二などプロレタリア文学に影響を受けたことを語った。

松本さんは「人は時代と政治の中で生きて翻弄

されている」と語り、大正デモクラシーの中で日本の詩で初めて女性と子どもを詠った詩人・金子みすずについて触れた。個人の尊重、小さな命のいとおしさ、傷つきやすい心のやさしさといったものが全て否定された軍国主義の中で、原稿を書き、詩を書いていた女性がどういう困難に遭っているのかを書くことで「戦争の時代の恐ろしさが伝われば」と、現在取り組んでいる作品の抱負を述べた。

終戦時に5歳だった志茂田さんは、竹槍で蕨人形を突き刺す不気味だけど滑稽な竹槍訓練や何の役にも立たなかったバケツリレーの防火訓練など銃後でいろいろなものを少しさめた目で見てきたと言う。「5歳の子が少しさめた目で見たのに、今の時代、さめた目が消えてしまう不気味な気配を感じる。戦争肯定みたいな意見を持っている若者が多い。戦争になることをさめた目で見る意識が失われていくことが、大変に怖い」として、文学の表現にはこのさめた目が必要と認識していると語った。

沖方さんは、社会性、思想性から離れたところで哲学や人の動きを綴ってほしいという願望は、欧米社会だと宗教性に委託されるもので、神父さんのように絶対的中立を期待するものと言えるところで、「社会から逸脱したところにおいて、皆を同じまなざしで見ている存在は、日本にはあるようではない」と指摘。そうした立場でのまなざしは絶対

に必要としながらも、「社会がその大切さを分かかって保護してあげない限り、いつまでも庵の中で暮らしてつれづれなるままに書くしかなくなる」と分析した。

次に、梓澤委員長は童話や昔話に触れて、現代の子どもたちに残酷なものを見せていけないのではないか、残酷を知る力が衰えているのではないかと問いかけた。

「よい子に読み聞かせ隊」の隊長でもある志茂田さんは、新作絵本には「臭いものにフタ」『臭いものに触れない』で「いいこと」だけを描くものが目につくことを指摘して、「こういう押しつけは子どもの判断力を養えない。判断力がないまま、何が悪かをよく理解しないままに思春期を迎えた時に、そのひずみが出る」と警告する。

子どもたちのいじめの経過を見ると、双方とも善悪の判断があまりできていないところで起こっており、歯止めのないじめになっていることを語り、「かちかち山」のように昔話が残酷なのは「臭いもの」をあえて知るための知恵」であり、「その昔話を通して、臭くないもの、いいことが理解されていく」と強調する。最後に「日本ペンクラブは最近子どもの本にも力を入れているが、こうした点ももっとアピールして導いていくようなことが必要だ」と思う」と助言した。

松本さんは、1812年にドイツのグリム兄弟が編さん、刊行した『グリム童話』の変化に言及。40

年以上かけて少しずつ改定版が出て、第7版まで次第に変わっていった。

『グリム童話』の正式名称は「家庭と子どもたちのメルヘン」で、ドイツという国はまたなく、統一国家を作るために子どもにはどんな童話を読ませるべきか、そのためには家庭はどうあるべきかという時代から、第7版になると、従順で賢い子を作るために残酷で暴力的な場面はほとんど取り除かれていったという。「女性も初版では元気で活躍していたものが、白雪姫のように家に閉じこもり、家事をするおとなしい女がいいとされる。家庭にいるべき女と従順な子の童話」に変わっていった過程を解説した。

終了時間が迫り、志茂田、松本、沖方の3氏と司会の高橋氏からこれだけは言っておきたいことを、そして浅田会長からシンポジウムのまとめがなされた。

志茂田 争い、戦争があったにしても、そこに人間性が横たわっていたのではないかという気がします。古代にさかのぼると、男の方が派手な衣装を着てイヤリングを付けていましたよね。だんだん男が地味になってきて、変な競争心が湧いて猛々しくなってきた。男がもつともっとおしゃれをするとい、そうすると抗争や戦争がなくなるんじゃないかと思っと思っています。

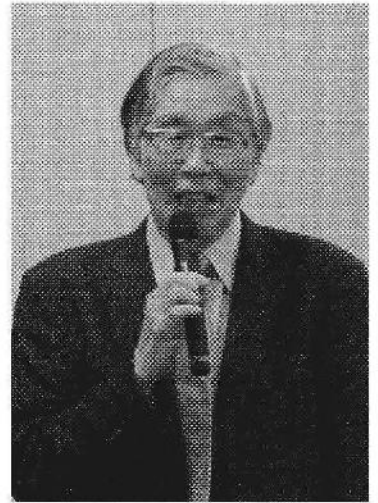
松本 『赤毛のアン』シリーズの翻訳をしています。かわいらしくて平和な女の子の物語とお思いでしょ

うが、全9巻、60年間にわたる主人公アン・シャーリーとカナダ社会の変遷が描かれています。第1次世界大戦で、アンの子どもが全員、徴兵でヨーロッパ戦線へ送られ、息子のひとり戦死します。最後の巻は第2次大戦の直前で、アンの子孫がカナダ空軍のパイロットになり、日本を敵国として戦うことになり。女性の書いたものでも、戦争を描いた作品は戦争文学になると思っっています。

沖方 若い人たちの商売にお金を出してあげてください。お年を召した方が 아이폰 はいやだとか、メールはいやだとか、どうかそんなことを言わないで、若者に目を向け、若者にお金を向けていたただかないと、若者が国のお金を頼るしかなくなる。それが一番危険なこと、それを回避するのに、ぜひ作家を育ててください。

高橋 世界中、あらゆる名作といわれるものは、ほとんどが戦争文学です。日本の古典の『平家物語』『太平記』も戦争という背景が必ず入ってくる。文学者は平和を希求すると言いが戦争があることによつて文学が成り立っているという矛盾があったりします。もう一つは、どんなに文明を築いていこうと文化を発達させようと、自然と関わらざるを得ない。自然の中における人間とは何かを描いていきたい。

浅田 日本は世界平和について、負うべき義務を3つ持っていると思っっています。一つは、唯一の核被爆国として、核廃絶というものを世界に対して訴えるリーダーでなければならない。政府はアメリカを気



高橋千劍破氏

日本ペンクラブ声明

「ダッカのテロ事件に抗議し、多様性と表現の自由の尊重を求める」

日本ペンクラブは、7月1日、バングラデシュ・ダッカ市で起こされた残忍なテロ事件により、日本からの7人の国際援助関係者を含む多数の人々が犠牲となったことに対し、強い憤りを覚える。近年、バングラデシュにおいて、多種多様に生きる人間の意義を認めない原理主義グループによるテロ事件が頻発している。国際PENもくり返し声明と警告を発し、同国の言論・表現の自由の現状について憂慮してきた。

公共の場における多様性と平和の保障は、言論・表現の自由の前提である。最近のヨーロッパや米

にしてあまり反核運動をやっていないのが現実であります。第2に、日本は寛容な宗教観を持っています。家に仏壇、神棚、聖書が並んでいるような国は世界中にそうない。宗教観の対立を仲裁する義務がある。それをできるのは日本人だけだと思います。第3は、戦争を放棄するという世界に冠たる平和憲法を持つ平和国家として、世界的な反戦運動のリーダーであるべき、それを訴え続ける義務がある。それでこそ日本は尊敬されると思

国やトルコでのテロ事件はもとより、世界各地で連鎖する憎しみの暴力に対して、厳正な法的措置がとられるべきであることは言うまでもないが、同時に、これらに対し、世界の市民社会が手を携え、強い抗議の意思を表明することが求められている。

あらためて日本ペンクラブは、世界のどこであれ、言論・表現の自由が妨げられない社会の実現に向けて努力したい。

私たちはこのたびのテロ事件のすべての犠牲者の家族と関係者に対し、深く哀悼の意を表するとともに、傷つかれた方々の一日も早い回復を祈ります。

2016年7月3日

一般社団法人 日本ペンクラブ

会長 浅田次郎

うんですよ。金儲けをいくらしても、景気には必ず浮沈があり、景気が落ちてしまえば軽蔑されるんですから。人類に対して日本人の負うべき3つの務めを続けていかなければならないし、子どもたちにもその考え方を伝えていきたいと、それでこそ日本人だと思います。

まとめ | 会報委員・山名美和子
写真 | 会報委員長・清原康正

日本ペンクラブの動き

- 5月
- 30日(月) 企画事業委員会
- 6月
- 10日(金) JTFフォーラム宇都宮(山本一力)
- 13日(月) 電子文藝館委員会
- 15日(水) 「子どもの木」委員会
- 16日(木) 言論業現委員会
- 17日(金) JTFフォーラム神戸(下重暁子)
- 20日(月) 理事会、定例総会、懇親会
- 21日(火) 言論表現委員会
「石橋湛山を読む会」
- 23日(木) 編集出版委員会
- 27日(月) 平和委員会